

幼い難民に未来を



発行：幼い難民を考える会 〒150 東京都渋谷区広尾4-3-1 TEL 03-499-1226 ●振替口座／東京1-36227



初めての難民者養成施設、カンボジアの人たちの
真実がうかがえる。中央はいいぎり代表
(撮影・森積幸士氏)

去る5月25日の第6回幼い難民を考える会総会では、初めての試みとしてパネル座談会「CYRがめざすもの」を開きました。この座談会の中から、会創立までの経緯と設立当初の様子を再現してみました。改めて足許をみつめ、これからの活動を考える一助としてください

佐藤 なぜこの会が始まったのか、最初のところをまずいいぎり代表からお話してください。

いいぎり 54年(1979年)11月に私が初めてタイのキャンプでカンボジア難民の様子を見たときは、3万人近い難民の中から、毎日30人、40人という人が亡くなっていくような状態でした。これは極端な飢餓と疲労、突然の環境の変化に耐えられない病人が多かったためです。何とか救援の手助けをしなくちゃいけないと、日本に帰ってから、うめだ子供

の家の保母さんたちを中心に呼びかけグループができました。同じ年の12月にもう一度キャンプに行き、その時一緒だったのが山極小枝子理事です。

効果的な救援をめざすなら、組織的に取組む必要があるだろうし、まずどういう活動が要求されているか見きわめてから動かないと、ただ単に物を運ぶだけの援助に終わってしまう。それを避けるためにも、今時間をかけて、方針をしっかりと作っておきたいと。当初は、食糧、医療な

ど、緊急援助に重点が置かれていました。私たちは、それほどの規模も力もないから、自分たちができることから始めようと、女性と幼い子どもの問題に目を向けることにしました。周囲に、子どもの問題に関心を持っている人が多かったものですから……。タイに逃げてくるまでの、飢えや戦火をくぐってきた死にもの狂いの経験に加えて、環境を極端に変えられてしまって、まともな成長をないがしろにされている子どもたちの問題を、もっとつっこんでいこうというのが結論でした。

子どもにとって、とにかく安全で人間らしい成長が叫ぶような、そういう環境整備から手がけよう。それも外から入ってきた私たちがやるのではなくて、子どもたちの親や周

開の大人が、自分たちでこうありたい、こうしたいという考えを実行に移す、そういう援助をしようとCYRの仕事が始まりました。

さて、どのようにしてCYRが国際救援団体として発足することになったかについてですが、一つには、日本国内での難民問題への強い関心が土台にありました。外国のできごとでありながら、自分たちの手で運動体として対応できるというところに大勢の人の思い入れが重なったのだと思います。

それは、日本に戻ってから、個々に出会った人たち、特に保育関係者の敏感な反応。同時に新聞などの報道を通して私たちの活動を知った人たちの、全国からの問合せや救援資金が殺到したことで、全然予期しない速度で組織づくりが進んだところに特徴があります。

具体的に現在のCYRを支える人たちとの結びつきは、その頃、東京足立区にある「うめだ子供の家」の中にあった上智モンテソーリ教員養成所で、教員養成の仕事をしていたことから、いつの間にか、その事務所が連絡場所になってしまいました。そこでひっきりなしにかかってくる電話の応待係を引き受けてくれたのが、養成所のかつての生徒だった関口久子さん（現在タイのカオイタンキャンプで働くスタッフ）の妹、関口晴美さん。たぶん、お姉さんに強制されたか何かで……(笑)。全国の方々の気持ちをつないで、私たちがしようと考えている救援のあり方を伝えたり、大切な要の役割を果たしていただきました。

奇跡!? 広尾事務所誕生まで

佐藤 関口さんのことが出ましたので、ご本人の口から何がきっかけで、この会に携わることになったかをお話してください。

関口 強制されてというのもないことはないんですけど……(笑)



関口晴美さん 元教師。五五年九月から現在に到るまで現地スタッフとして活躍している。

難民問題が大きく報道された頃に、子どもの写真にすごく引きつけられたものがあって、関心を持っていたんです。その時たまたま、姉から、とにかく留守番をする人がほしいということで(笑)電話番号とか、全国のみなさんからの問合せの返事とかをやったのがきっかけです。

佐藤 会の発足の時から関わってらして、今の広尾の事務所ができるのにご尽力くださった広戸さんからその間のご説明を……。

広戸 実は私も、いいぎりさんとは別なんです、54年にタイに行ったんです。そのきっかけは、聖心インターナショナルスクールの先生がたまたま会議でバンコクに行き、ものすごい数の難民と疲れきったボランティアを見て、10人ほど交替に来てくれないかと言うんです。急速、人を集めて行ったわけなんです。

そのあと、深水神父（現理事）にある場所で、いいぎりさんと山極さん、香川澄子さんにひき合わせていただく機会がありました。私は教育のほうに携わっているものですから、緊急援助だけではない何か、と思っていたので、それならばと、発足会（1980年2月17日）に参加したわけです。そのとき、どうしてもといわれて世話人をお引き受けしたんです。

私は事務局設置のお手伝いをさせていただきました。足立の仮事務所を出なくてはいけなくなったとき、何もあてがなかったんです、実は。はたと、聖心女子大学の広い敷地内はどこか(笑)、何かあるに違いないと思ひまして……今事務所が立って

いる所は、実は修道院の物干し場だったんですよ。あそこならまあ何とかなるんじゃないかと。(笑)

下はコンクリートですし、建てるにはちょうどよいと思って、修道院に声をかけたんです。初めはすぐにもうまくいくかと思っていましたが、話が煮つまってくると行き詰まってしまって……もう駄目かと思っていたら、本当これ奇跡なんです。実はこの仕事に関わりたという私の友だちがいたのですが、その方の坊っちゃんが急に亡くなるという不幸があったんです。私はキリスト教なんですけれどもね、その坊っちゃんに取り次ぎを頼ったわけですよ。「何とかしてちょうだい」と。そうしますと、不思議なことに翌日開かれた修



広戸直江さん CYR設立当初から世話人として活躍。現在CYR理事。聖心女子大教師。

道院の会議で、今まで駄目といわれていたのがコロッとひっくり返ってですね(笑)「よろしい」ということになったんです。

土地は、ですから提供してくれると。「建物はどうするんですか」と言われて、その辺を考えてなかったんですよ私。(笑)それがまた偶然なんです、学祭の受付に手伝いに来ていた子のお父さんが建



案関係だったと、はたと思い出して(笑)、プレハブひとつくらいもらえるかしらと(笑)頼んでみたんです。それでそのお父さんが建ててくださったわけなんですね。あれからずっと居すわって(笑)いるんです。

会を、考えるきっかけに

佐藤 たいへんご苦労だったと思いますが、ユーモアたっぷりにお話いただきました。ではタイの現地ではどんなふうに進んでいったのか、その辺を。



司会・佐藤恒夫さん
五六年八月現地視察
現在CYR理事

いいぎり バンコクのUNHCRから正式に活動開始の依頼があり、組織固めは国内の方々にお任せして発会式の1か月後の3月に、私と、もう一人のメンバーが、第一次派遣グループとしてタイに向かいました。依頼があったとはいえ、受け入れ準備などまったくなく、キャンプ通いに便利な国境の町アランヤプラテートでの宿舎探し、キャンプ内での子どもたちのための施設、保育者を養成する場所の設定、資材の購入、他団体との調整、活動プロジェクトづくりと、目の回るような忙しさでした。



木々に囲まれた広尾の事務所と事務局の
スタッフ・鈴木、峯村、笹尾(手前)

その頃は、キャンプまでバンコクからバスで片道5時間の距離を往復する日常でした。活動の場と定めたカオイゲンキャンプには、十何万人という難民が入ってました。入口から一番奥まで歩いて1時間もかかるほどの広いこのキャンプのいったいどこで、私たちの小さなグループが仕事をするのかと、気の遠くなる思いがしたものです。もちろんすぐにも、保育者の養成や保育が始められる場所がほしかったんですが、あれこれと調整に時間がかかって、それがなかなかできませんで、キャンプ入りして1か月後によく、よその団体が緊急援助の食糧配給に使っていた急ごしらえの竹の小屋を借りて、養成を始めました。それと同時に進めていた敷地の交渉がうまくいって、キャンプ内の新しい場所に敷地だけ確保できたのが、同じ年の9月、関口さんが初めてタイにきた頃です。そのあとは、強力な助人を得て、CYRの現地活動が現在まで続いているわけですが、関口さんにその頃のいきさつをバトンタッチします。

関口 事務所で問合せを受けたり、現地との連絡をしていて、実際、それが現場にどういう形でつながっているのかというのを自分で見たいと思って現地に行かせてもらいました。55年の12月には希望の家が21区にできましたが、それまでは間借りの保育センター3か所を保育と養成をしているような状態でした。

佐藤 森定さんもかなり早くから現地に行かれましたね。

森定 私が会に入ったのは、55年に新聞で保育に関するプロジェクトを始めたことを知って、あ、これは是非関わってみたいと思ったからなんです。たまたまその時パートで保育をやっていたのですが、目的としたプロジェクトがあったということで、CYRの門をたたいたんです。その頃の事務所は、本当に熱気がム



森定なほみさん 五五年一〇月から半年間現地入スタッフ。帰国後、訪問ボランティアとして活躍

ンムンしている感じで、これからがんばるんだ(笑)と思って。

現地入りしたのは、55年10月でしたが、結構安定してきた状態で、「希望の家」の構想が練られてました。私がいる間にどんどん、あれよあれよという間にその計画が進んで、立派な保育園ができていくんですね。その頃、キャンプにいるカンボジアの人たちも、自分たちの「希望の家」だっという感じでとても嬉しそうにやっていたのをよく覚えてますね。

いいぎり 会の名称のことをまだ説明していなかったので補足します。なぜ「幼い難民」にしたか。あえて難民の子どもとしないで、子どもという独立した人格を尊重する立場をとったのは、この人たちの成長が守られて初めて、祖国を逃れてきた人たちの、あるいはその国の自立の問題にまで結びつく。私たちの活動の位置づけをしたつもりだったのです。それから、助けるとか、救う行為を上から下に与えることに終わらせてはならないという考えがありました。これは、救援がしばしば自立ではなく、依存の度合を高める結果になるということがわかっていたからです。

与えるだけの援助は、援助の本質を見失うことにもなる。だから、私たちはこのきっかけを「考える」ことに使いたいと思ったわけです。難民問題とはいったい何か。なぜ国際的な救援の対象になるのか。アジアで何が起きているのか。日本と難民発生国との関係はどうなっているか。この会の長い名前にも、かなりの思い入れがあるんです。(文責・編集部)

カオイダンキャンプが作られて6年。当時、十数万人もいた難民の数は、今は約2万6,000人に減っていますが、その半数は、第三国へ行けず、6年間も鉄条網に囲まれた生活を余儀なくされている人々なのです。そのお一人であるCYRの木工部で働いているKさん(35才)に、キャンプでの生活、今望んでいることなどを語ってもらいました。

(聞き手・関口晴美)

—いつカオイダンに来ましたか？

「1980年7月11日です」

—カオイダンはどんな印象を受けましたか？

「これといった印象はありませんでした。ただ、カオイダンの人たちがこわかった。私はサケオキャンプから移ってきたのですが、そこでは、カオイダンの人たちはみんなクメールルーージュだと言われていたから。だから、私はカオイダンの人たちがこわかった」

—実際に来てどうでしたか？

「同じクメールの人で、こわいことは何もなかった」

—ご家族は何人ですか？

「今は6人です。母と妻と子ども3人。父はサケオで死にました。私の兄弟は生きてるかどうかわかりません」

—カオイダンキャンプでは、どんな生活をしてきましたか。働いていましたか？

「来た翌日から、建物(家や公共の建築物)をつくる仕事につきました。82年まで。82年に仕事がなくなったのでやめました。そのあと5か月ほど、小学校で教えていました。2I区の小学校です。先生の勉強をしながら、同時に教えていました。」

—故郷ではどんな生活をしていましたか？

「私の故郷は、コンボンスプーのサムローントゥン県のプレイサンボク

です。そこでお米とココナッツを作っていました。その後お寺で勉強してお坊さんになりました。お寺で先生になって、町の子どもたちに3年間教えていましたが、そのころから戦争が激しくなっていました。—これほどキャンプに長くいることになると思っていましたか？

「最初は、カンボジアに平和と自由が戻ればすぐ帰れると思っていました。そんなに戦争が長びくとは考え

「今は何もほしくない。一つの目的だけ。将米、第三国へ定住することだけを考えています」

—第三国に行きたいと、いつから考えるようになりましたか？

「1983年ころからです。最初は、サケオから来た人たちは、誰も第三国へ行きたいと思わなかった。言葉もわからないし、何も知らないからです。でも、今はみんな第三国へ行きたいと思うようになってきました」

—友だちや親戚の人で第三国へ行った人はいますか？

「います」

—その時どう思いましたか？

「とっても一緒に行きたかった」

—キャンプで楽しいことは何ですか？

「クメール語や、英語を勉強できることです。英語を一生懸命勉強して、第三国へ定住できたらと思います」



Kさんは、アメリカの定住希望は受け入れられず、昨年オーストラリアと日本への定住申し込みをしました。現在は、定住調査の面接を待っているところです。

(日本語訳・遠藤五郎氏)

なかった……。今は全然変わりました。なぜかという、カンボジアに平和と自由が戻ってくることはまったく期待できないからです。

—カンボジア国内の様子をキャンプで聞いたことはありますか？

「ありません」

—国内がどうなったら帰りたいと思いますか？

「シハヌークの時代と同じように平和な時が来たら」

—今望むことは何ですか？

第三国定住のため一時滞在施設へ向かうバス。



が始められることになりました。これらの人々はノンベン出身者が多く、学歴、職歴のある人も多いので、第三国へ行く可能性はかなり強いようです。

希望の家レポート



子どもたちと「嬉しいいさん」の手遊びをする現地スタッフの菅野麻さん。

●ミルクの分量の調節と

飲むマナーを指導 (85年12月)

12月中旬は朝晩の冷え込みが厳しいせいか、ミルクをお代わりする子どもも少なく、欠席も目立ちました。子どもの数が少なくても、保育者はミルクの量を減らさないで、ミルクが余り、木工部などのワーカーに配られることもしばしばでした。長いキャンプ生活で、もらうことに慣れてしまった生活全般にも通じる姿勢を感じ、人数によってミルクの量を加減することを提案しました。

また、立ったまま、あるいは歩きながらミルクを飲む子どもがみられるので、マナーについても保育者に注意を呼びかけました。

●手作りおやつ (86年2月)

23区保育園では、2月に2回、保

育者たちが5パーツ(約35円)ずつ出しあってお砂糖などを買い、子どもたちのために、おやつを作りました。配給の豆と米粉をもちより、保育者のお母さんや洋裁クラスの先生たちも手伝い、半日がかりでカンボジアのおやつが出来上がり！子どもたちも手伝ったり、豆の煮える様子を楽しそうに見ていました。

配給に頼る生活が長びくキャンプの生活の中で、保育者たちの手で、自主的におやつが作られたことは、子どもたちにとって大きな喜びであり、保育者たちも、子どもたちの様子に力づけられたようです。

●遊び時代を経験できなかった保育者たち

現在10代後半から20代の保育者たちが子どもの頃は、戦争(1970年口

ンノルのクーデターをきっかけに起きた5年間の戦争)や、強制労働の時代(1975-79年)であったために、遊ぶべき時期に遊び足りていないように見うけられます。手遊び、縄とび、ゲームなど、幼い頃を取り戻すかのように夢中になって遊びます。子どもの存在を忘れてしまって、大人だけで楽しんでしまうこともあるほどです。

●年齢・月齢計算に保育者全員で取り組む (86年2月、3月)

毎月行なわれている身体測定の結果を表につけるのは、保健担当の保育者です。その担当者から、まだ表のない子どもの分を新しく作りたいという話があり、それをきっかけに



年齢、月齢の計算に保育者全員が取り組むことになりました。保育者たちのほとんどは自分の生まれた年しか知らないで、子どもたちの年齢・月齢計算のしかたに興味深く、熱心に学んでいきました。

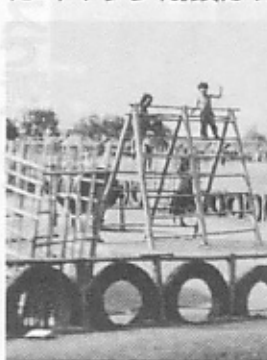
FC保持者の第三国定住認める

一九八三年八月までに、カオイダンに入ってきたFC保持者は、今まで第三国への定住を認められていませんでした。これは、七九年、八〇年からずっとキャンプにいる人たちが優先させるためです。しかし、今年第三国定住者の数が著しく減っているため、FC保持者にも第三国定住が認められ、七月から面接調査

四月二〇日付の「バンコクポスト」は、カオイダンの難民の定住率が向上しない場合には、五か月以内にカオイダン閉鎖の可能性があると報じています。これは、タイの国家安全委員会の議長ブラソン氏がバンコクポストの電話インタビューに答えたものです。

今までも何回か閉鎖のうわさは流れましたが、今年ほどくに定住していく人の数が少ないので、UNHCRも深刻に受けとめているようです。

カオイダン閉鎖か!?



キャンプ内の運動場

かおいだんかわら版

財政危機を乗り越えるため 全会員のご協力を!!

CYRの活動を支える、会の財政状況がいま、きびしい曲角にさしかかっています。この事情を、会員のすべての方々に知っていただくため、理事会は、次のようにアピールします。

ご承知のとおり、CYRの財政は



①基本財政(会費、賛助会費、バザー等の収入) ②内外の団体からの寄付 ③UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)からの助成金——の3本の柱から成り立っています。とくに、毎年800万円台で提出されてきたUNHCR助成金は、CYR事業費をまかなう最大の資金源でした。

しかし、世界各地で発生する戦乱、飢餓など人類の不幸はとどまるところなく、そのあおりでUNHCRの“台所”は、どうやら火の車です。このため、今年のUNHCRからの助成金は518万円に落ち込み、今後とも、減少の一途をたどる見込みです。

理事会

この深刻な事態を踏まえ、理事会では真剣な討議を進め、結論として①現地プロジェクトの“火を絶やしてはならない”②UNHCR助成金の減少分は、会自身の努力で克服しよう、の2点を確認しました。

具体的には、まず会の基本財政を充実するために会費納入を励行していただくことです。さらに、これまで、やや取り組みのおくれていた、国内の各種の団体に対するCYRの活動のPRを活発にし、その理解にもとづく善意の支援資金の拠出をおくことです。

これまでも全国社会福祉協議会、レフュジーズ・インターナショナルなどの国内団体、ファン・リア財団などの海外の諸団体から、CYRに対して絶えざる支援がありました。今年の新しい動きとして、全国老人クラブ連合会、ジャパン・タイムズ救援資金、東京ライオンズ・クラブなどがその“輪”に加わりました。

これらの善意の結晶の資金は、す

カオイダンキャンプでは、1984年8月以降キャンプに入った人々にも、昨年9月から食糧配布が受けられるようになってきました。

昨年11月には、これらの人たち6500人は、カオイダンに隣接するカオイダン・アネックス(通称バンブー)キャンプへ強制的に移されました。そのうち3~5歳の子どもの

カオイダン・アネックスで新プロジェクト

数は約700人。「希望の家」に通っていた子どもたちも100人余り含まれています。

現在アネックスには、外来診療所、食糧配布所、母子保健所がありますが、保育の施設はまだありません。

CYRでは、アネックスの子どもたちにも保育が必要と考え、保育園をつくる準備を進めています。

とりあえず3月末には、家庭で親や家族が子どもと遊べるよう、身近な材料を使った人形や布ボール、ロープなどの教材セットを配りました。アネックスに住んでいる、元CYRの保父さんが、どんなふう子どもたちが遊んでいるのか、親の関心などをみるため、家庭訪問を行なっているところです。



新しいワゴン車で、アランヤプラテートとキャンプの往復もトラブルが少なくなった。

で、現地スタッフ達の足となっている中型ワゴン車の買い換え、カオイダン・アネックスにおける新しいプロジェクト(別項記事参照)の基礎づくりなどに、充当されました。

会員の皆さま方の周囲に、CYRの仕事に理解をもち、援助の手をさしのべていただける団体がありましたら、ぜひ会のPRをし、事務局にもご連絡ください。理事会も、皆さまのご努力に、心から期待しております。

カオイダン側からアネックスを見る。境には土盛りへのいと有利鉄線がある。

会員登場

カンボジア国内
にも援助を

東京都世田谷区 栗野 鳳

会員であり、元カンボジア大使の栗野さんは、去る2月20～27日、カンボジアを訪問し、国内の様子をご覧になりました。3月11日にCYR事務所にお出でいただき、そのときのお話を伺いました。以下は、その一部です。



日曜日は、玉宮見学などにたくさんの方がくり出し、プノンペン市内にはぎわう。

私が自分の手で日本大使館を閉鎖して、在留邦人や館員と一緒に引揚げて（1975年4月5日）から、10年10か月振りのカンボジアでした。

プノンペン市内の印象は、20年くらい前（シハヌーク時代）の状況に似ていました。ただあの頃より、人の数も車の数も少ないので、当時の地方都市といった趣でした。違うのは、王侯貴族と金持ちが少ないことです。

ヘンサムリン政権（カンボジア人民共和国）フンセン首相にも会いました。首相は、1990年までに、経済状態を戦前（1970年以前）の水準に戻したいと言っていました。社会的な面のことも含めての復興は、このままでは難しいと私には思えました。外からの援助がどうしても必要だと思ふのです。

プノンペンの小・中学校は、いずれも授業はやっていますが、教材がほ

とんどなく、特に物理化学の実験器具は全然ありませんでした。

すでに4、5年前から、西欧の民間団体はカンボジア国内で、医薬品の供給、婦人の識字教育、就学前の子どもの教育、肢体不自由児・孤児への援助など、10以上のプロジェクトを行なっています。日本からは初めて、今年の8月、JVCがプノンペンで活動を始めるような状況です。JVCが「総合的人道援助」計画の活動を進めていくうちに、日本でできることがもっと明らかになってくると思います。

政府レベルでは、国連の一部の機関（ユニセフなど）しか援助を実施することができていません。カン

講演会を
開きました東京都
杉並区

福田 栄

私たちは去る3月8日、東京阿佐谷でカンボジアの女性、ヘン・サイホンさんを迎えて講演会を行ないました。私たちというのは、子持ちの2人の主婦です。普段から、物を大切にしない今の子どもたちを見て、カンボジアの幼い難民のことを思わずにはられません。彼等は戦争によって国を失いましたが、日本の子どもたちは、あり余った物によって、何か大切なものを失っているのではないかと。

そんなとき、サイホンさんの著書「燃えた雨」（情報センター出版局）に出会いました。彼女は女として、妻として、母として、私たちと同じ時代を生きてきました。しかし、戦



孤児院の建物は立派とはいえない。

プチア国民は、いまだに国際政治の大波に揺すぶられ、その犠牲になっています。しかし、政治問題が片づくのを待っていることは許されないので、民間の手で少しでも援助したいと思います。

（写真提供/JVC・熊岡路矢氏）

争は人々の生活や心をいやおうなしにひき裂いてしまいます。私たちは、戦争を知らないけれど、子どもたちに戦争の話をしなければなりません。女の目から見た、本当の戦争の話が聞きたいと思って、この講演会を企画しました。

当日は、タイ難民キャンプのライドを見ながら、今のカンボジアの状況や人々の様子をうかがいました。サイホンさんは今、祖国のためカンボジアと日本の架け橋になって働いています。



質問に答えるヘン・サイホンさん

聞きに来てくれた人たちが持ち帰った思いは、様々だと思います。この平和な日本で論じても始まらないことかもしれません。しかし、彼女の祖国に対する熱意は、会場中をつつみ、ひとりひとりの心に重たく残ったと思っています。

アジアをむすぶ うちわ作り

東京都
目黒区



鹿野京子

鹿野さんは目黒区の駒場幼稚園の園長さんですが、CYRのパネル等を使い、機会あるたびにアジアの子どもたちの話を園児に聞かせていらっしゃいます。先日、卒業の文集を送っていただいたので、その中からどんな風に園の子どもたちに話しているのかをご紹介します。

「みなさんには、お父さん、お母さん、兄弟たちとの楽しい毎日があります。食べる物や着る物、住む家にも恵まれて幸せですね。けれど世界には貧しい人々が大勢います。アジアのインドやバングラデシュ……くずれた小屋に住む人、道路にゴザを敷き家の代わりにしている家族、飢えや病気に苦しむ老人や子ども、小さい時から働き自分で生活しなければならぬ少年少女——カンボジアでは戦争がありました。兵隊たちに田畑の作物を奪われ、沢山の人が食物を求めて、隣の国タイへ向かって何日も長い道を歩き続けました。12月の誕生日に話をしたその中のひとりの女の子のことを皆はよく覚えていましたね。……」

こういう語りかけに対し、園児たちは次のような感想を持ったようです。

- 戦争で家をなくした子どもがいた。
- 畑が荒れて食べ物なくなった。
- 着る物やおもちゃがない。
- 病気になるても、お薬がない。
- ひとりぼっちになって、よその人についていった。



絵：辻 結二郎くん
(6歳)

●その話を聞いて何か助けてあげたいと思った。

そして、「幼稚園でみんなの力で出来ることは何かを一生懸命考え」手作りのうちわを売ることになったのです。

- うちわは障子紙を使ってびょうぶ折りにして色を考えながら染めた。
- 広げて干して乾かした。
- きれいな染め紙に刷毛でのりをつけて、ていねいにうちわにはった。
- プレイデーの日ならべて売った。

私のすすめる一冊



静岡県
三島市

蜂屋敦子

される側から見た「援助」

——タイからの報告——



永井 浩・著
勁草書房・刊
一、〇〇〇円

川がある。今日まで一度も氾濫をおこした事のない、小さな、おとなしい川である。水は岩の間をぬって海に向かって流れ、あるものは再び地下水となって周辺の地を潤し、そこに様々な動植物を育てた。

けれども数年前、この川の土手と川底は、コンクリートで固められた。住民がそれを望んだのではない。「美しい町づくり」という開発計画のた

めである。川の水は、もはや地を潤さず、命を育む事もなく、一直線に海へとつづ走る。もう、水ひき草の花も咲かない。サワガニもいなくなった。山や川で、この手の「開発」がすすんで以来、かつて水不足などあまり縁のなかったこの町も、日照りが二十日も続けば、たちまち節水、断水の騒ぎとなる。

何のための、誰のための「開発」だったのか？ これは、私が生まれた町の川の話である。

この本——される側から見た「援助」を読んでいて、この川の事を思い出した。この本は、援助とは何か、開発とは何かを、援助される側、「開発」を押しつけられる側の視点でとらえようとしている。ここに書かれているのは、決して「よその国の事」ではない。大なり小なり、私たちの日常にも形を変えて存在しており、その根は同じである。ここに登場するいくつかの草の根の援助活動、開発運動のあり方は、我々が、援助や開発を考え、それを実践しようとする時、忘れてはならない大事な事を教えてくれている。

- みんなが買いに来た。
 - 全部売れてうれしかった。
- アジアをむすぶうちわづくりは、大成功だったようです。最後に鹿野さんはこう結んでいます。
「お金は、その人たちの一番必要とする物に代えて使われます。私たち

の小さな力が寄り集まり大きな力となり、アジアへ世界へひろがります。それは大きなよろこびです。
木や竹、小石を工夫しておもちゃを作り、壊れたら修理して大切に使うカンボジアの子どもたちと手をつなぐ日をたのしみに——。」

日本ではしつけができません!

編集部・石井じゅん

私は編集プロダクションに勤めているので、いろいろな方とお会いする機会があります。

先日、世界の子育てをテーマに、あるカンボジア女性にインタビューしました。カンボジア人を選んだのは、仕事の中にもできるだけアジアのことや、難民問題をとりこみたいと思っているからです。

この方は、日本人の子育て、日本の子どもに、かなりの疑問、という



より怒りを感じているようでした。
電車に乗っても、公園に行っても小さな子どもがまるで王様のようになっている。日本の子どもは、礼儀正しくないし、言葉遣いは悪し、態度が大きすぎる——と腹を立ててしまうのだそうです。

東南アジアでは、幼いうちほど厳しくしつけ、大きくなるに従ってゆるくします。日本では逆です。

決定的に日本と東南アジアで違うのは大人に対する態度。東南アジアでは、大人は人生の経験者として尊敬されます。子どもが大人のような口のきき方をしたり、大人に対して生意気な態度をとったら、親だけではなく、近所の大人からも厳しく叱られます。口答えなど考えられないのです。まわりの大人が、自分の子どもではなくても同じようにしつけるので、子どもにとって逃げ道はありません。だからしつけもうまくい

原稿大募集!!

会員登録に原稿をお寄せください。すすめたい本、現在やっていること、仲間の募集、勉強していること、疑問に思っていること、への希望その他何でも。横書き、16字詰で書いていただけると助かります。字数は600~800字程度。お待ちしております!!

くのです。

ところが日本では、まず最も身近にいる母親が甘やかし、許してはいけないことを許してしまう。まわりの大人は知らん顔。こういう日本では、とてもしつけはできません、と。

何でも競争の今の時代、学校でいじめられないために、カンボジアの子どもたちはたくましくなったけれど、かわいい性格がなくなってしまったとも聞きました。

悲しくて、やりきれない話です。

おたより紹介

「幼い難民を考える会」のみなさん、はじめまして、こんにちは。

私は小学校6年生です。

私がお手紙を出そうと思ったきっかけは、学校の図書室で『わたしが会ったアジアの子ども』という本を見たことからです。

みなさんは、カオイゲン難民キャンプ内に、幼い子どものために保育園を造ったということですね。保育園の名前が「希望の家」と書かれてありました。私は、この名前を見てなんだか感動してしまいました。

そして、この本の中に、ある一人の難民キャンプの少年のことが書か

れてありました。その子は、キャンプの中にある小高い丘の上で毎日ギターをひきながら歌っているのです。その歌というのが、とても悲しい歌なのです。兵隊に殺されてしまった家族のことを歌っているのです。そして、殺されてしまったお母さんに自分の気持ちをうちあけて歌っている歌なのです。わたしは、この部分を読んで、お父さんやお母さんを兵隊に殺された、難民の子どもたちのさびしくて悲しい気持ちが、とてもよくわかるような気がしました。

「幼い難民を考える会」のみなさんは、幼い難民などを将来、自分で生

活していけるようにつくしてやり、私は、とてもみなさんのことを尊敬しました。私も、将来みなさんのように、ボランティア精神を持って、難民やめくまれない人たちを助けてあげたいです。

「幼い難民を考える会」のみなさん、これからも、難民の子どもたちのためにがんばって下さい。私は、いつでもみなさんを応援します。

では、さようなら。
群馬県安中市・阿久澤幸代



今回は2ページも

ひまわりが

スペースジャック!!

3回分まとめて報告しま〜す。



定住者の相談を受けて

(1月25日)

日本国際社会事業団 伊東 よねさん

1. ISSとインドシナ難民

国際社会事業団(ISS)は第一次大戦後、1921年に英国ではじめられ、一国の福祉の範囲内では解決できない二国以上にまたがる家族と個人の問題を解決する仕事をしています。世界120か国にわたってネットワークをもち、移民、国際結婚・離婚、国際養子縁組、戦災孤児、遺産相続、家族の再会などの問題を扱ってきました。

ポートピープルが日本に上陸して以来、ISSは定住のための世話や里

親さがしの仕事に携わってきましたが、定住希望者が増えるとともに、ソーシャル・ワーカーに地域にいてもらって相談を受けるという方法を考えました。現在は日本全国にわたって約60名います。

2. 日本で問題

相談の内容は、医療のこと、生活費のこと、子どもの学校や入試のこと、住まいのこと、結婚や離婚のことなどさまざまで、また、連絡してくる人も、本人、友人、近所の人、あるいは、学校、会社からなど、ケ

ースによってちがいます。

具体的には、子どものことでは、勉強の問題はやはり大きいです。数学などは非常によくできても、国語や古典、社会などは日本語が障害となって苦労しています。それにしても、定住した子どもたちが日本の社会の中で自信をもって生きていくには学校に行き教育を受けるのが一番よいのです。住居の問題では、日本人の保証人がいないとアパートが借りられない、ということがあって、日本人との交際が少ない人は苦労しています。

カンボジアやラオスの人は家族の多い家庭が多いのですが、ベトナムの人は独身の男性が圧倒的多数です。奥さんがいて子どもがいれば、子どものことや生活を通してまわりの日本人とのつきあいも出てきますが、独身の男性だと昼間はずっと仕事で、アパートに帰っても一人で非常に孤独になりやすい。それで当然、結婚相手がみづかりにくい。

また、年齢が若いうちに日本に來

1回カンボジア語入門 (3月22日)

満開の梅に小雨が濡れそぼつ3月22日(御存知、月に一度の楽しみ、月例会ひまわりの開かれる第4土曜日)、プレハブの事務所に、カンボジア語が響き渡りました。お招きした講師は、バン家のマーチとモッチ。笑顔のすてきな双子のお嬢さんです。

吉祥寺教会に御両親とお兄さんと住み、近くの中学校に通っています。学校では折り紙クラブに入っているそうです。

さて、生徒の方はCYRの会員やひまわりに興味を持って訪ねてくださった方もまじえて16人。簡単な日

常の挨拶を教えてもらったり、1から10までの数を大合唱したり、お菓子をつまみながらおしゃべりをして、あっという間に2時間が過ぎてしまいました。マーチ先生、モッチ先生、楽しく、アカデミックなひとときをありがとう。カンボジア語と日本語の橋渡ししてくれた岡田さんにもお世話になりました。そして、集まってくれた皆さまにオークン・チュラン!! (菅原潤子/記)

これがカンボジア語だ!(ワンポイント・セミナー)

おはよう
こんにちは チョンムリエップスワー
こんばんは
さようなら チョンムリエップリア
ありがとう オークン

注1 ただ言うのではなく合掌のポーズもお忘れなく。

注2 棒読みではなく「チョン」にアクセントをおく。

注3 能面顔ではなく、優しく微笑みながら言うとカンボジア語らしくなる。



た子ども、日本で生まれた子の、母国語教育の問題、家において、比較的日本人とのつき合いが少ない主婦は、日本語がなかなかうまくならない、等の問題もあります。

相談を受けるに当たって気をつけなければならないことは、まず実情

をよく把握するということが、第2に本人がどのくらいの問題解決の能力をもっているかをよく見きわめること。自分でできるところは手助けをせず、自立能力を育てていくことが一番大切なことです。

(寺沢由紀/記)



カンボジアのお料理会 (4月26日)

於：恵比寿社会教育館調理室

3月にカンボジア語を教わったマーチとモッチのお母さんから、後藤さんと私(双葉)が料理を習ってきたので、みんなにお教えしました。メニューは、パーティー等で人気のあるチャ・ジョーというひと口サイズのはるまき、ニョムというサラダ、そして当日来てくださった横浜に住むハイ・テシアシーさん、ソン・スクンテアリさんご夫婦が牛肉サラダを一品加えてくれました。

カンボジア人の御夫妻が腕をふるった牛肉のサラダの作り方はとてもダイナミックで美しく、すばらしいものでした。もちろんお味も。

包丁のトントン鳴る音、ピーナッツをすり鉢でする音、お肉を炒める音の中、明るい雰囲気楽しく作れ、是非またカンボジアのお料理会を開きたいと思います。

では、チャ・ジョー(はるまき)の作り方を紹介しますので、皆さんもカンボジアの味に親しんでみてください。

〈材料〉

はるまきの皮	2袋
豚ひき肉	300g
玉ねぎ	1個
人参	1.5本
もやし	1袋
はるさめ	25g
にんにく	半かけ
油	適量
砂糖、化学調味料	各小1
パイヨン	小さじ2
塩	少々

(つけ汁)

トットライ	大きじ2
(優等魚露、カンボジアの醤油)	
醤油	大きじ3
お湯	大きじ6
レモン汁	2分の1個分
砂糖、酢	各大きじ3
ピーナッツ	50g

(トットライは、三浦屋吉祥寺店、横浜中華街等で売っています)

〈作り方〉

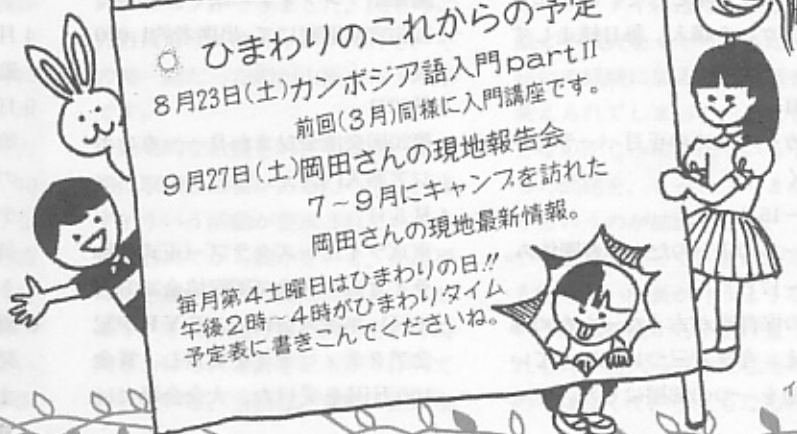
- ①玉ねぎはみじん切り、人参は細めの千切り、はるさめは湯通しし小さく切る。もやしも小さく切る。
- ②①と豚ひき肉を混ぜる。
- ③②ににんにくをおろしたものと塩、砂糖、化学調味料、パイヨンを入れ混ぜる。
- ④はるまきの皮を4等分に切り、③を入れ巻く。巻き終わりに卵をいたものをのり代わりに使う。
- ⑤油で揚げる。

※塩を具に混ぜずに、つけ汁をつけて食べても良い。つけ汁は左記の材料にピーナッツのすりつぶしたものと人参の千切りを混ぜる。

(田中双葉/記)



◎ ひまわりのこれからの予定
 8月23日(土)カンボジア語入門part II
 前回(3月)同様に入門講座です。
 9月27日(土)岡田さんの現地報告会
 7-9月にキャンプを訪れた
 岡田さんの現地最新情報。
 毎月第4土曜日はひまわりの日!!
 午後2時-4時がひまわりタイム
 予定表に書きこんでくださいね。



イラスト・内海陽子



CYRきのう・今日

タイ・カオイダン

1月中旬

保育者たちが自主的に家庭訪問を行なってから、保育園の子どもの数が増える。1日平均300人余り。

1月20～21日

いいぎり代表、現地視察。保育者との話し合いを持つ。

1月22～24日

深水理事、現地視察。キャンプの様子をビデオに収める。

2月3日

国境の避難村では、UNBRO（国連国境救援機関）による「女性のためのプログラム」が行なわれている。CYRは、木工の教材を100セット作って協力することを約束。

3月1日

サイト2で、5歳児以下の子どもに食糧配布をUNBROが行なうため、人口調査を手伝う。サイト2南の、女性のプログラムを見学。



サイト2の子どもたち

4月5日

アランヤプラテートとキャンプの往復等に使う車として、新たに日産のワゴンを購入。毎日快走している。

4月11日

ワーカーのための正月パーティーを開く。

4月12～15日

クメールの正月のため保育園休み。

5月1～17日

21区の保育室が古くなったため建て替え。今まで三つに仕切っていた部屋を一つの部屋にした。オー

ブン形式になったため、保育者も子どもの動きが見やすくなり、協力もしやすくなった。



国内

2月8日

訪問ボランティア打合せ。活動を活発化させるために、定期的に情報交換を行なうことにした。今回4月のバザーで、カンボジア料理を出品する件を話し合った。

2月22日

第19回交流会ひまわり——61年度前期の計画を立て、主に日本に定住したカンボジア人との交流を深めることにした。

2月25日～3月2日

横浜市大倉山記念館にて「アジア理解のネットワーク展」が開かれた。CYRはパネルを展示し、3月2日にはスライド上映を行い、会の活動を報告した。

3月15日

中曽根首相主催による「福祉厚生関係ボランティアの集い」に出席。首相官邸園庭にて、出席者約1,000名。

3月22日

第20回交流会ひまわり——カンボジア語入門。

4月5日

東京ライオンズクラブ（正式名称ライオンズクラブ国際協会330-A地区）年次大会にて、CYRが記念アクティビティを受賞し、賞金100万円を受けた。大会会場には



山極小枝子理事

約2,000名が出席し、CYRはスライドを用いて活動報告を行なった。

4月19日

野原由美、渡タイ。坂倉恵二、短期ボランティアとして渡タイ。5月10日帰国。

4月20日

第13回幼い難民のためのバザー。新聞の都内版に、品物募集の記事が大きく掲載され、読者からの問合せが殺到。品物の寄付者は500人を超えた。当日は雨天にもかかわらず盛会で、赤坂に住むミム・ソファンさんが作ってくれたカンボジア料理（カレーとお菓子2種のセット）も売られ好評のうちにすぐ売り切れとなった。収益は、1,570,063円と今までの最高。



4月26日

第21回交流会ひまわり——カンボジア料理の講習会。

4月30日

監査会

5月25日

第6回定期総会。宮城県など遠方の会員も含め51名が出席。パネルディスカッションの後、出席者全員から感想、意見を聞くことができ、よい意見交換の場となった。

●編集部より

発行が予定よりも大幅に遅れてしまいました。次回こそ……。